

お盆がやってきます。大切な人が、いなくなってしまったことに、改めて思いを馳せる期間です。

・ ・ 大切な人の死。

近くにいることが当たり前だった家族、私が悩んだときいつも力になってくれた友。その人が、私たちの目の前からいなくなりました。

これは、^{のこ}遺された私たちにとって、受け容れ^い難^{かた}い事実です。

受け容れることが難しいゆえに、私たちの心は、無意識にその事実に対して、悲しいと思う感情さえも、停止させてしまうことがあります。

「なんだか夢を見ているみたい」

そのような言葉を、大切な人を亡くした直後の遺族の方が発することがあります。それは、受け容れ難い現実^まに膜^くをはって、そこから自分を遠ざけようとしているのだと思います。

しかし、通夜や葬儀の読経が始まったときや、^{ひつぎ}棺の中の亡き人の姿を見たとき、火葬場^たで荼毘^びにふされるときに、その膜が瞬時に破れ、止まっていた感情が一気に噴き出し、それまでの分の涙が、あふれてきます。

その時はじめて、その人の心は、大切な人の「死」に正面から向き合うのです。そして、そこから、大切な人の死を受け容れるという、心の^{いと}営^なみがはじまります。その営みにかかる時間は、人それぞれですが、長い時間かかるものだと思いますし、長い時間をかけるべきだと思います。

お盆は、その営みを深めていく日々であるといえるでしょう。迎え火^たを焚いて、亡き人を家にお迎えし、数日間共に過ごし、送り火を焚いて送る。お盆は、短期間のうちに、出会いと別れを経験していることになります。

そして、お盆は、毎年^{めぐ}巡^りってきます。

亡き人と巡り合った時を「大きな出会い」、大切な人が亡くなった時を「大きな別れ」

とするならば、お盆は、小さな出会いと別れであると、いうことができるでしょう。

「これは夢に違いない」と無意識に思ったほど重い、大切な人の死という事実を受け容れていくために、私たちは、毎年、小さな出会いと別れを、繰り返すのです。

私たちは、ていねいに、お盆の時間を送らねばなりません。かつて亡き人と共に過ごした時と同じように、ひと時ひと時を、心静かに、いとおしみながら。